



**令和8年（2026年）の新しい年を迎えて
(温故知新：創立50周年記念誌の概要)**

長崎県技術士会 会長 山口 和登

新年あけましておめでとうございます。旧年中は会員の皆様に多大なるご協力、ご支援をいただき大変感謝しております。本年もよろしくお願ひいたします。

長崎県技術士会が昭和50年6月に創立され、昨年は50周年という記念すべき年となり、それに伴い長崎県技術士会創立50周年記念誌の発刊を計画しました。編集作業は川村委員長、横山、園田、山本、浦瀬、山口の各委員の6名からなる編集委員会を設置し進めてきましたが、ようやく今年の3月には完成し、4月には皆様にお届けできる運びとなりました。以下、記念誌の概要について述べたいと思います。

記念誌の構成は、挨拶、祝辞に続き、本文は「長崎県技術士会創立の背景」「長崎県技術士会と日本技術士会本部・九州支部との関係」「歴代役員と草創期に活躍された方々」「50年間の各種記録」を川村委員長が担当されています。「平成から現在までの各種活動」を私が担当いたしました。会員投稿は過去の役員、現在の役員、初期の合格者、有志（ベテラン技術士、若手技術士、女性技術士等）の38名から投稿いただきました。「長崎県技術士会の将来像、今後への期待」は日本技術士会長崎県支部長の山口昭光支部長と私が担当いたしました。「機関紙APRENの軌跡、目次一覧」と「創刊号から最新号の91号まで全号をA5版に縮小版掲載」を山本委員・園田委員・

**長崎県技術士会
令和8年1月10日発行・責任者 山口 和登**

横山委員が担当しています。表紙は及び裏表紙のデザイン及び全体校正は浦瀬委員を中心に作業を進めています。

以上の内容で創立50周年記念誌は編集中ですが、300頁を超える記念誌となり、500部の印刷製本を計画した為、資金的課題が残りました。その解決策として協賛広告や寄付の募集を致しましたところ、44社・団体からの協賛広告、関係者1名の寄付金が寄せられ、何とか目途が立ちました。厚くお礼申し上げます。寄せられた協賛広告は記念誌に全て掲載しますのでご覧ください。また、祝辞、投稿を頂いた関係者各位の皆さんには心より感謝いたします。表題のサブタイトルに「温故知新」と入れましたが、過去の事柄を研究し、そこからこの記念誌が、そのための一助となることを念願します。

今後、長崎県技術士会は60年、80年、100年と未来永劫に続くと確信しますが、そのための一助とこの記念誌がなることを念願いたします。

以上、長崎県技術士会創立50周年記念誌の予告概要について主に述べました。長崎県技術士会の運営につきましては役員をはじめ、会員各位のご協力、ご支援が不可欠であります。特に会員増員に向けてのご協力、ご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

最後となりましたが今年の皆様のご健康、ご健勝、ご多幸を祈念しまして新年の御挨拶といたします。

【創立50周年記念誌協賛広告御礼】

本誌の発行に際しましては、特に協賛広告をお寄せいただきました44社・団体の皆さんには厚く

御礼申し上げます。皆様のご協力により、記念誌が一層充実したものとなっております。また、故会員の御夫人よりご寄付を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

記念誌は現在、編集作業が進行中であり、遅くとも4月には会員各位及び関係者の皆様のところへお届けできるものと思われます。参考までに協賛広告のご芳名、寄付金ご芳名を記載します。

【協賛広告のご芳名】(五十音順)

(株)アサヒコンサル、(株)アース、(株)アールデ、E-tecs コンサルタント(株)、(株)ウエノ、(株)エム・エム・ブリッジ(株)、扇精光コンサルタンツ(株)、(株)大島造船所、(株)オリエントアイエヌジー、(株)カミナガ、(株)工藤測量設計、建設環境研究所(株)、(株)五省コンサルタント、(株)三喜工業、(株)サンコー技研、(株)ジオ・ワークス、(株)実光測量設計、(株)昭和ボーリング、西部環境調査(株)、(株)西部試錐工業、(株)第一検査工業、大栄開発(株)、(株)大日ジオテック、(株)長大、東亜建設技術(株)、(公財)長崎県建設技術研究センター、(一社)長崎県建設コンサルタント協会、(一社)長崎県測量設計コンサルタンツ協会、(一社)長崎県地質調査業協会、(株)長崎測量設計、(株)長崎地研、西日本開発(株)、西日本技術開発(株)、(株)ニッソク、(株)ネオグローブ、橋口技術設計(株)、(株)PAL構造、(株)微研テクノス、藤永地建(株)、(株)ペック、三菱重工業(株)、三菱重工交通・建設エンジニアリング(株)、安武技術士総合事務所、(有)吉川土木コンサルタント

*各協賛広告の詳細は3月発行の記念誌の協賛広告欄をご参照ください。

【寄付金提供者ご芳名】

故 柏原公二郎氏 ご夫人 柏原恭子様

「安全を考える～副会長就任ご挨拶に代えて～」

長崎県技術士会 副会長 石瀬史朗

明けましておめでとうございます。

新年を迎え、ご家族の健康と安全をお祈りされた方も多いと思います。

私はこれまで発電プラントの建設プロジェクトに従事し、主に機械据付工事現場の管理・技術指導を行ってきました。この経験のなかでは不幸な災害も起こし、安全について何度も考えさせられました。技術が進歩した今、IoTやAIの活用はもちろん欠かせませんが、それだけでは人の安全は確保できません。

昨年6月に長崎県技術士会副会長に就任し、まずご挨拶を述べるところですが、今回は私の経験の中で得た「安全確保のための気付き」について述べ、ご挨拶に代えたいと思います。

1. 一体感の醸成

はじめて建設プロジェクトに従事したころは、「自分の身は自分で守れ」と先輩から教えられました。働く一人ひとりが自分の身を守れば、結果として災害ゼロになるぐらいの理解で、安全確保とはそんなものだと思っていました。

ご存じのように建設現場では法令に基づき、労働者の安全と健康確保が義務付けられ、具体的には元請け事業者は統括安全管理者として、発注先の安全管理評価と指導、作業場のパトロール、作業者一人ひとりの安全器具の装着確認などをおこなっています。私の経験した現場では、それらに加え上位管理者は早めに出勤し、作業者が出勤する時に挨拶をしたり現場でのごみ拾いや管理区域

の草刈りを定期的に行っていました。また、会話するときは相手を名前で呼び体調を気遣うなどを心がけていました。

これらの取り組みは後になって、一人ひとりが大切な職場の仲間であることを理解してもらい、信頼関係を築くことで一体感を醸成するためだと分りました。数百人の人々と関係を築くのは並大抵のことではありませんが、これらを地道に続けることが現場を守る責任者の役目であり、後に私もそれに倣って取り組んできました。

一体感を築けた良い例が、東日本大震災の復旧の時です。多くの発電所が津波を受け停止し、地元だけでなく全国から人が集まり同時並行で復旧工事をしましたが、その約3年弱は重大災害がほぼ起きました。お客様はもちろん、すべての作業者・関係者が組織の壁を乗り越え、心を一つにした結果だと当時の関係者は口をそろえます。これは“チームワーク”という一言ではすべてを語れない一体感だと思います。

2. 経験を活かす

自分が痛い思いをしたり見たりすると、同じ行為は繰り返さないものです。例えばカッターナイフを使うときには、刃が走る方向に手や指を置かないことに注意していても、実際には刃先が鈍っていて想定外の動きをしたり、丸いものを切るときに滑ったりなどで怪我することがあります。そして「こういう時は危ないんだ」という“貴重な経験”が残り、次からは繰り返さないようにになります。

とはいって、皆さん全員に痛い思いをしてもら

うわけにはいきません。できることは経験者がその経験談を話して、未経験者に教え伝えることです。原爆被爆者が“ノーモアヒバクシャ”と声を上げ、核拡散防止を訴えるのと同じように、仲間に同じ経験をさせたくないという思いで語つてもらうことです。なかなか自分の苦い思いや失敗を語るのは抵抗がありますが、そういう機会を増やすようにできればと思います。

3. 自らの思いとプライド

経験はしていないなくても、ある思いが働いて意識が自発的に高くなるケースがあります。先日職場で、横断歩道以外での道路横断や歩きスマホをどうすれば無くせるかを議論したところ、参加者から「子供の前では信号はしっかりと守るし歩きスマホなどはしません。大人として手本を見せねばならないので。」と話してくれました。家族を守りたいという愛情はもちろんですが、誰かがみていると「自分は良く見られたい」「恥ずかしいことはできない」という思い・プライドも生まれて意識が変わります。

もう一段階レベルが高くなるとこれらには関係なく、大谷選手のように球場で落ちているゴミを拾うという行動につながります。これは野球に対する愛情、尊敬、愛着があるからだと感じます。同じように建設現場での一体感が職場への愛着につながれば、居心地の良い素晴らしい現場になるものだと思います。

4. むすび

安全には安全ルールと法令があります。昭和47年に労働安全衛生法が制定されたあと、これらを守らせてすることで労働災害による死亡者は大幅に減少してきました。一方、ここ十数年は減少率が鈍

化する傾向になっています。

今から必要なのはルールを守る・守らせるという受け身の姿勢から、上記で記載した例のように、「我々は何のために安全を守るのか?」という原点に立ち返り、自らの思いで自発的に行動を変える・変えさせることではないでしょうか?このことから、私の職場では「私たちが大切にしたいものは、ともに働く仲間、家族と大切な人の幸せ」との標語を掲げ、啓蒙をしています。

安全は技術士倫理綱領の“安全、健康、福利の優先”に示されていますが、一言では語れない奥深いテーマです。本投稿がヒントになり、災害が少しでも少なくなれば幸甚です。

以上

令和7年度第3回CPD研修会報告

扇精光コンサルタンツ(株)

山本 奉彦(農業部門・建設部門)

令和7年11月5日(水)に開催された長崎県支部第3回CPD研修会は、会場とWeb併用によるハイブリッド方式で開催されました。その概要を報告いたします。

- ・開催場所:諫早商工会館
- ・出席者:会場31名、Web14名

演題1 「加齢に伴う心身の危弱状態『フレイル』とその予防方法について」

【講師】長崎大学病院リハビリテーション科

高畠 英昭 教授

高齢社会において重要な課題である「フレイル」に注目し、その理解と予防の実践を目的に、進行すれば寝たきりや要介護につながるが、栄

養・運動を中心とした日常生活に取り入れやすい予防の工夫と、フレイルの原因にもなる認知症予防についても講演いただいた。

【講演内容】

フレイルとは、加齢により心身のはたらきが徐々に弱まって疲れやすくなったり筋力や気力が落ちてくるなど、「健康と要介護の間の状態」を指す。病気を患ってはいる訳ではないが、体力や活力が低下し、進行すれば転倒や寝たきり、要介護につながるリスクが高まるが、早めに気づいて生活習慣を整えることで改善が可能である。

フレイルのサインとして、体重の減少、歩く速度の低下、握力の低下、外出頻度の減少や気分の落ち込みなどが現れるので、自分自身や周囲の人々が、変化を見逃さず早めに気付くことが重要である。



写真-1:高畠英昭講師

フレイル予防の3つの柱は、「栄養」、「運動」、「社会参加」である。肉・魚・卵・大豆などを日々の食事に取り入れ、筋肉の材料となるたんぱく質をしっかりと摂り、ウォーキングやストレッチ、筋トレなど、無理のない範囲で身体を動かすことは、体の健康づくりにつながる。地域活動への参加など人との交流は、心の健康づくりと孤立や「うつ」の防止につながる。

また、地域包括ケアの視点では、生活習慣の工夫や多職種連携が重要となる。

フレイルを正しく理解し身近な予防法を実践す

ることで、誰もが安心して歳を重ねられる社会づくりにもつながる。

【感想】

中年期の肥満が認知症リスクに繋がることや、口腔の状態不良が肺炎の発症リスクに繋がること、後期高齢者になるとフレイルが指數関数的に増加するという話を聞き、日々の健康管理や早期の予防、健康維持の重要性をあらためて認識する機会であった。

演題2 「諫早市におけるラウンドアバウトの取組み」

【講師】諫早市建設部 金松 正一郎 氏
(建設、総監)

昨年2月から県内で初めての社会実験が行われている諫早市内のラウンドアバウトの概要や、メリットとデメリット、全国の導入事例、設計上の留意点のほか、諫早市の道路整備計画や進捗についても詳しく説明頂いた。



写真-2：金松正一郎講師ほか

【講演内容】

ラウンドアバウトとは、環道に優先権がある、信号機や一時停止を要しない環状交差点のこと、交通量が比較的少ない平面交差部に適している。1960年代にイギリスで研究されヨーロッパで普及はじめ、1990年代からはアメリ

カでも普及が進むなど、欧米では指數関数的に普及が進んでいるが、日本では全国で176箇所（R7.3現在）と少ない。

車両や歩行者の安全性向上や交差点流出後の低速走行が維持されるなど、安全面に優れるほか、整備・維持コストの削減や信号待ちや一時停止による遅れ時間の削減などのメリットがある反面、歩行者の動線や通過時間、整備に必要な用地の増加等がデメリットである。

諫早市内にある、大規模な新興住宅地と既存集落間の信号機のない交差点で、出会い頭の事故が数件発生したため、交通安全対策としてラウンドアバウトを計画したが、県内に導入事例がないことから、長崎県公安委員会等の関係機関と協議し、課題解決を図る目的で社会実験を行っている。

全国的には、災害時の機能維持や景観形成に寄与している事例もあり、今回の社会実験の経験や知見を活かして、効果が期待される箇所に導入を検討していきたい。

【感想】

県内初、九州内に12箇所（諫早市の社会実験含む）と、非常に少なく珍しい形状の交差点について、全般的な知識を得ることが出来た。社会実験を通じて、環道優先、右回り通行など、ラウンドアバウト独特の交通ルールを、地域住民をはじめ多くのドライバーと歩行者に周知することも社会実験の大きな目的であると感じた。

演題3 「スパー型浮体式風況観測装置（MIA）の実用化」

【講師】協和機電工業（株） 川口 季昭 氏

(電気電子)

日本においては、再生可能エネルギーの電力供給割合を上げる切り札の一つとして積極的に進められている洋上風力発電の適地選定にあたり、重要なファクターである洋上での風況観測用に日本初の国産商用機として、長崎で誕生した浮体式ラーダーである「MIA（みーあ）」の開発過程や県内企業の取組みについて説明いただいた。

【講演内容】

MIAは、安定した3点係留方式採用により振れや波浪による動搖が小さく、独立電源システムを備え安定的な長期観測を可能にしている。遠隔でも操作を可能とする監視システムを備えるなど、競合機種であるオランダ製やカナダ製に比べても優れた特徴を持つ。

2016年度、五島・桃島沖で実証実験が始まり、青森県むつ市小川原港沖の風況観測、厳冬下の苫小牧での耐久試験、対馬での風況観測を経て開発された。現在では、県内5社により浮体式風況観測サービスを提供する株式会社MIAを設立し、国のセントラル事業や資源・エネルギー

一開発の政府系機関事業、NEDO事業へも参画し、大深水に向けた施工方法の確立や、みちびき衛星を活用した波高計測確立等を目指しており、今後、洋上風力発電の普及に向けた技術的・制度的貢献が期待されている。



写真-3：川口季昭講師

【感想】

化石燃料の依存度が高いわが国において、再生可能エネルギーの普及は急務である。洋上風力発電の適地選定に不可欠な洋上風況観測が、長崎県内の企業の技術により支えられていることを知り、一県民として誇りに感じた。

(以上)

※ 機関紙発行担当からのお知らせ

- (1) 日本技術士会長崎県支部の2025年度第4回CPD研修会は、1月28日(水)に諫早商工会館で開催予定です。ハイブリッド形式で実施しますのでオンライン参加など詳細な申込手続きについては日本技術士会長崎県支部事務局折田(E-mail : s.orita@zb4.so-net.ne.jp TEL : 095-824-3620)までお願いします。多くの皆様の参加をよろしくお願ひいたします。

編集代表&連絡先
N.ソノダ技術士事務所 代表 園田直志
sonoda_naoshi@icloud.com